夏空の輝く下で

一. 小川のほとり

深い緑を割るようにして、白い遊歩道が下っている。あたりの空間を埋めつくすような蝉しぐれの中、駆け下りていく子供たちを目で追いながら、圭介は妻の陽子と肩をならべて歩いていた。

道におおいかぶさっている木々の枝から、あぶら蝉の声が降り注いでいる。二人が通りかかると、声が止んで一瞬の静寂が耳を打った。しかし、遠くでうなっている林の音が、すぐに二人を包み込んでしまう。

子供たちのむき出しの肩や白い帽子に、木洩れ日の影が流れる。捕虫網を持つ二郎が一番後ろだった。手ぶらの夏子が先頭に立ち、虫籠を肩から下げた末の光子がそれに続いた。

間もなく子供たちは光の中に飛び出して立ち止まり、横に並んで坂の上を見上げる。遊歩道を下り切った所は木立が切れて、広場になっている。

「おかあさん、はやくおいでよおっ」
二郎が叫んだ。親たちが相変わらず歩みをはやめないのを見て、二郎の叫びに姉と妹が和した。

広場まで下りると、大勢の子供たちの声が聞こえる。左手の桜の植え込みの向こうに小川が流れ、そこで親子連れが水遊びをしているのだ。

小川は、二メートル幅くらいのコンクリートの浅い水路に湧水を流したもので、夏の間は親子連れの間格好の水遊びの場となる。水着を用意してくる子供もいるが、大方の子供はパンツ一枚になって、水しぶきを跳ね上げて走りまわる。

母親に手を引かれて足下のおぼつかない幼児から、小学校の上級生くらいまでいる。さすがに小学校の上級生にもなると、パンツ一枚になるのは気恥ずかしいらしく、半ズボンやスカートを濡らしながら跳ねまわっている。

ようやく下りてきた両親の顔を子供たちはかわるがわる見上げた。
「先に行っていていいでしょう。ねえ……」
圭介が「うむ、うむ」と頷くのを見て、子供たちは植え込みを巻いて走って行った。末娘の「うわーい、うわーい」というはしゃぎ声が遠ざかっていく。

小川を挟み桜の植え込みとは反対側の、やや離れた位置に楠が三本並んでいた。踏み石づたいに小川を渡った圭介と陽子は小川の近くの喧騒を避けて、楠の下にシートを広げた。そこからは水に戯れる人たちを一目で見渡すことができた。

ややあって陽子が立ち上がった。

「何か飲み物を買っておくわ」

池の端の方へ去っていく水色のワンピースの後姿に陽が照りつけ、ほど良く陽に焼けた二の腕の輝きが圭介の目に差し込む。室内から明るい屋外へ出た時のように彼は思わず目を細めた。

陽子はなかなか戻らなかった。ついでに池の周りでも散歩しているのだろうか。子供たちの所在を確かめるために、圭介はしばしば小川のあたりに視線を泳がせた。桜の枝の下に庇護されるようにして行き来している人々の有様が、彼の視界の中で鮮やかな色の動きになった。

子供たちに劣らず、親たちの装いも華麗な色彩を誇っている。

「カラフルだなあ」

圭介は独りごちる。色鮮やかな光景を映す網膜の刺激は、補色的効果を持つものなのだろうか。目をつぶった彼の頭の中に浮かんでくるのは全く反対の世界だった。

二. 補色の世界

クレーンの轟音が頭上を去ると、ポンプとブロワーの運転音が耳につく。ススがこびりついた天窓が明り採りの役を果たしていないため、古い工場の建物の中は真昼でも薄暗い。工事屋たちは熱気がこもっている中を忙しく動きまわっている。翌日に増設機の運転開始が予定されているのだ。

試運転調整の担当として圭介が現場入りして二週間が過ぎていた。この間に、ポンプやバルブを点検調査し、試運転を行い、機械の運転に支障のないことを確かめてきた。前日までに自分の仕事を全部終えていた圭介は、電機メーカーの制御装置の最終調整に立ち会っていた。

二階の電気室内にはシンクロスコープやレコーダー類が乱雑に置かれ、試験用の仮配線が足下を這っていた。シンクロスコープの緑の窓は得体の知れない曲線を点滅させ、見ている者を苛立たせるようだった。

それでも電気室にはクーラーがあり、明るい窓が切っただけでした。

「どうかね、何とかいけそうかね」

係長が圭介を呼んで尋ねた。

「三時間くらい残業すれば終わるようなことを言ってますよ、彼らは」

「なるだけ早く切り上げるように言っておいてくれ……」

係長は工事屋たちを連れて一杯やることを考えているのだった。「いい気なもんだ」と圭介は心の中でつぶやいた。係長は前日の夜に来たばかりである。圭介たちが宿に戻った午前一時過ぎには彼は高いびきだったのだ。

前日は忙しかった。圭介はポンプ類の据え付けてある地下室と機械との間をたびたび往復した。気温の上がりきらない午前中はまだいくらかよかった。午後になると汗をかく量が増え、アンダーシャツ無しで直接身に付けている作業服の背中が一面に濡れた。脇の下を汗が流れ落ち、度重なる階段の上り下りで足は鈍っていた。

地下室の仕事を終え、圭介が息を切らしながら階段を上ったのは暑さの盛りだった。暑さに打たれて体力を消耗しているため、頭がくらくらと揺れ動くようだ。出口まで上って来て彼は立ち止まった。機械の周りで仕上工たちが芯出し作業をしているのが見えている。

レベルゲージやダイヤルゲージの目盛を読むには工場内は暗すぎるのだろう、仕上工たちの頭上には工事用の投光器が架設されている。その熱っぽい光が暑さを募らせている。

傍のウォータークーラーに覆いかぶさるようにして圭介は水を飲んだ。ゴクゴクと鳴るのどが心地良く、冷たい水は足の指先にまで伝わっていくようだった。

最後の一口を含んで、うがいをしようと上を向いた時、頭がぼうーっとかすんでいくのを覚えた圭介は慌てて水を吐き出した。ウォータークーラーを支えにして倒れそうになるのを防ぎ、顔を上げて必死で目を凝らす。

仕上工たちと機械が目に入ったのは一瞬のことで、すぐに真っ暗になった。身体が崩れていくのをこらえながら、もう一度目を見開こうとしたが、闇から逃れることはできなかった。

ウォータークーラーにしがみついている間に脳貧血の発作は去った。ほんの短い時間だったのだろうが、圭介にとっては長いトンネルを息を詰めて通り抜けた後のようであった。

仮設ハウスに引き上げてきた圭介は、焼けたトタン屋根の下のベンチにしばらく横になっていた。真っ暗闇が視界を覆う直前の印象だけが彼の記憶に鮮明だった。

薄暗い工場内に彩りを与えていたのは、機械に塗ってある薄い青緑の新しいペンキと赤い消火器だけだったように思える。しかし、あの時の印象ではそれさえも色を失っていた。

捕虫網が放り出される音に、圭介は現実には引き戻された。「じゃまなんだよ、これ」と言って走り出そうとする二郎に圭介は、「おい、ちょっと待て」と声をかけた。「なに?」と言って近づいてきた二郎の尻に手を当てる。「濡れてるじゃないか。ズボンとシャツは脱いで行きなさい」

二郎は素直に頷き、言われた通りにした。水辺に向かっていく二郎に言い含めておいたので、夏子と光子が圭介の所へやって来た。「パンツ一枚だけになりなさい」と言うと、光子は黄色のワンピースを脱いで水辺へ走って行った。夏子は何やらもじもじしている。

「あたし、ぬれないからいいわ」
「どうして?みんなのしぶきで、もうぬれてるじゃないか」
「すぐかわくもん」

二年生くらいでも女の子は、パンツ一枚になるのには抵抗感があるのかな、と圭介は訝しむ。

「そうか、それならまあいいか」と言って彼は大きなあくびをした。
「わあ、おとうさん、いまごろからあくびしてる」
夏子がいつもの調子で父親をからかった。
「そうさ、お父さんは今いくら眠っても眠り足りないんだよ。工場では夜も眠る時間があまり無かったからね」
「ふうん……」
不思議そうに圭介の顔を覗き込むと、夏子は納得したように弟妹たちの後を追った。

工場の工事現場から戻って四日経っても圭介の眠気は抜けなかった。暑さで体力を消耗しているところに無理を重ねたせいだろう、体力が回復するまではだめだと圭介は思った。

運転開始日の前日はとうとう徹夜になった。電機メーカーの調整員たちは、圭介たちが見通しを尋ねるたびに、あと二時間くらいとか三時間くらいとか返事をした。

電気調整員たちのやっていることは圭介にはよく分からない。彼らは突然、機械を動かすことがあり、そのたびに機械は重々しく、あるいは甲高くうなり声をあげる。

その間にレコーダーに記録を採ったり、シンクロスコープの窓を覗き込んだりする。それが終わると機械を止め、回路図を睨んで頭を抱え込む。

機械を運転しながらの調整作業のため、機械担当の圭介たちも帰ってしまうわけにはいかない。工事監督の林と組立指導員の新田、それに圭介と係長の四人が居残っていた。「あいつらは一体何をしてるのかね、未だ終わらないのかね」とたびたび不機嫌に尋ねていた係長も、十時を過ぎると諦めたように無口になっていた。

手持ち無沙汰の四人はそれぞれ、積み上げた鋼管の上や部品を入れた木箱の上に、思い思いに腰を下ろしてぼんやりとしていた。機械が動き始めると、誰かが立って行った。初めのうちは申し訳なさそうにして、腰を下ろしている圭介たちの前を通り過ぎていた電気調整員たちも、疲れてくるにつれて表情に変化が無くなっていった。

午前一時を回った。仕事をせずぼんやりしている四人の顔にも疲れが濃く現れていた。ちょっと一服してくる、と誰にともなく声をかけて圭介は裏口から外へ出た。工場の建物の内部は禁煙なのだ。

外の空気は昼の熱気をはらんだままどんよりと淀み、靴の裏を通して感じる地面には、未だ熱がこもっているようだった。少し離れたところに鉄筋アパートの社宅があり、その手前に櫨が並べて植えてあった。

大きく枝を広げている櫨の葉先は、小さな子供の頭を撫でる手のようにやさしく垂れている。煙草に火をつけると圭介は櫨に向かって歩き出した。

圭介の住む団地の部屋の窓から一本の櫨が見える。窓際に立って櫨を眺めるのが圭介は好きだ。春になるとたくさんの細い枝いっぱい柔らかい小さい葉を吹き出す。夏は、下に入ってくる者をかばうように張り出した枝に豊かな緑をたくわえ、部屋の中にいる圭介の耳に風の吹き抜ける音を送ってくる。

秋には、もうすぐ散っていくであろう葉の間を透して、柔らかく澄んだ空の色を見せてくれる。そして、冬の櫨は自分の出番でないことを悟って、目立たぬようにしている者のようである。圭介にとっては、櫨の四季が団地の四季なのだ。

工場の櫨は何かを待っているようにじっとしていた。ふり仰ぐ圭介の目に映るのは、いくつもの黒っぽいかたまりばかりだった。その葉のかたまりの間から見える空間もまた色が無かった。

あの工場の記憶という、決まって白と黒だけなのは一体どうしたというのだろう。圭介は自分のまわりを見回してみた。桜の木の緑は濃く、人々の動きは相変わらずカラ

フルだ。頭上から降り注ぐせみの声に、楠の梢を揺らす風の音が混じっている。

圭介は立ち上がった。頭上には木の間ごしに夏の空が輝いていた。眠たげな目には眩しすぎる輝きだった。細めた目の中で楠の梢の葉の一枚一枚が揺れていた。

工場にいた自分は、今の自分とは無関係の人間ではなかったのか。自分はいつもここにおいて、工場の夢を見ていたのではないのか。だってそうじゃないか。今の自分がしばらく前に、あの白と黒だけの世界で呼吸していたなんて誰も想像できやしない。

圭介はそんな幻想にとらわれていた。しかしそんな時でも、あれは紛れもなく自分自身だという意識が心のどこかに引っかかっているのだった。

どちらも圭介自身なのだ。だが、どちらの日々が自分にとって本当の日々なのだろうか。今こうして公園の楠の下にいるのは、再び工場で働き続けるためのリフレッシュのためなのだろうか。

それとも、工場で苦しい汗を流し、眠気を我慢して働くのは、今のこうしたひと時を過ごすことのできる生活を支えるためなのだろうか。どちらの日々が主人であり、どちらの日々が従者なのだろうか。

圭介はほっと息をついて、もう一度空を仰いでみた。空の輝きが微笑を含んでいるようだった。

あの辛い仕事に自分が耐えてきたのは、今のこの瞬間のためなのだ。圭介は自然にそう思った。ゆったりとしたものが心のすみまで広がっていく。圭介はくつろいだ気分に浸りながら、水辺にたわむれる人々をぼんやりと眺めやった。

三. 陽子

背後からの陽子の声に圭介は我に返った。

「どうかしたの……？。座ってればいいのに……」

陽子が小脇に抱えている紙袋の中で、液体の入った缶が触れ合う音がしていた。無言のまま振り向いた圭介に、陽子が子供たちの所在を尋ねた。

「あそこだよ」と右手を上げて示す圭介に頷きながら、

「もう少し遊ばしておいたほうがいいわね」と言って、陽子は紙袋をシートのすみに置いた。

「あなた、ずい分ぼんやりしていたみたいよ。あそこで私が手を振ったのに気づかな

かったもの……」

陽子が池の端を指差した。

「ほう、そうだったかな」

「そうよ……。何か考え事でもしていたの？」

「うん……。ちょっとね」

陽子はそれ以上何も尋ねなかった。黙ってシートに腰を下ろし、小川の方を眺めやった。陽子に色々と言われると、答えるのが億劫になるのが圭介の常だが、こうして彼女が黙ってしまうのも彼にとっては息苦しかった。

陽子と並んで座ると、圭介は今しがた頭の中を巡っていたことを、一つ一つ拾い上げるようにして話し始めた。

自分にとっては今のこの瞬間が主人たる日々だと思う、というところまで話が進んだ時、陽子が訝しげな視線を圭介に投げかけて呟いた。

「そうかしら……。でも、あなたは現場で働くのが好きみたいに見えるわ……」

陽子がそう言う理由がすぐには解らず、圭介の表情に不快の色が走った。

「現場の仕事はつらいことばかりだぜ。終わって家に帰ってくるとほっとするのさ、いつも……」

「でも……。ここ何年かの間、東北の工場の工事現場に行っていた頃のあなたは生き生きとしていたわ。わたしも子供たちも、何だか置き去りにされてしまったみたいに思えたもの」

「……」

陽子のそのひと言が、彼女と出会った十年前の秋のことを圭介に思い出させた。

その北関東の工場は、雑木林の中の一部を切り開いた敷地の中にあった。どうしてこんな所に、と思えるほど街から離れていた。社宅も工場に隣接して建てられ、周囲には畑と林のほかには何もなかった。

従業員家庭の主婦たちは、歩くと一時間以上はかかる街まで乗用車やバイクを駆って買い物に出かけていた。

その工場の増設工事で、圭介はほぼ四ヶ月近くをそこで過ごした。その間、二度ほど関西の本社に戻るがあった。

陽子はその工場の事務員をしていた。圭介に本社から電話が入ると、陽子がそれを伝えに現場にやってきた。そんなことが度重なる中で圭介は陽子と気軽に言葉を交すようになっていった。

圭介の四ヶ月ほどの滞在の間に、工場の運動会で同じチームになって楽しんだり、早めに工事が上がった日の夕方には一緒にお茶を飲みにいったりするようになっていた。

工事が完了した頃にはもう年の瀬が迫っていた。関西の本社に帰る直前に圭介はいつもの喫茶店で陽子に会った。これが最後の別れになるんだろうな。言葉には出さないが二人ともそう感じていた。

圭介はこの日、陽子が退職して大学を受験することを知った。彼女は高校時代から憧れていた文学を学ぶ決心をしたのだ。家庭の事情で諦めていたが、圭介と色々な話を交わすようになってその思いが再び頭をもたげたと言う。

そういった予感でもあったのだろうか。陽子はこれまでの四年間、給料のほとんどを貯めていた。それを学費に当てるから両親に負担をかけずに済むとのことだった。

年が明けて春になり、圭介に陽子からの手紙が届いた。彼女が大学に合格し、通い始めたことが告げられていた。

その年の六月、圭介の会社で組織体制の大きな変革があった。プロジェクト推進部門が設計部門から切り離され、受注活動から試運転・運転指導までを含む案件を一貫して担当する部門として独立したのだ。プロジェクト推進部門の本拠地は東京支社に置かれることになった。

プロジェクト推進部門への異動辞令を受けた圭介に、東京勤務と東京生活が始まった。春に手紙をもらっていた陽子に、圭介は近況報告のつもりで東京転勤を伝える手紙を書いた。それぞれの道を進むと決めていた二人の心には、それ以上のものが湧いてくることは無かった。

暑さが残る九月中頃の午後だった。夏の休日出勤の代休を取った圭介は、御茶ノ水駅から駿河台下への道を下っていた。神田神保町の書店に向かう圭介は、坂を登ってくる学生たちの間を縫うようにして歩いていた。

すれ違おうとしている学生たちの中、一人の女子学生に圭介の視線が止まった。あれは陽子ではないか、そう感じたのだ。自信がなかったので、圭介はじっと見つめていた。すれ違う一瞬その女子学生と圭介の視線が重なった。圭介の予感は確信に変わっていた。

振り向きざまに圭介は声をかけた。振り向いたのは紛れもなく陽子だった。これが二人の再会だった。

四. 現場の呼ぶ声

陽子が口にした東北の工場のことは、圭介の記憶にも鮮明だった。あれもきつい工事だったと思う。この夏の工事よりきつかったのではないだろうか。一時帰社した後の土曜日、圭介は午後の三時過ぎまで寝床から離れることができなかった。起き上がったからも不快感にしている圭介の身体のことを陽子は心配した。そんな日の夜でも、彼はいつもの就寝時刻にずっと眠りにつくことができた。日曜日には疲れも大分抜けていたので、圭介は子供たちを連れて公園に行き、一日を過ごした。

一週間ほどで圭介はよみがえった。そうになると心がせいた。早く現場に戻りたいという意識が彼を支配していく。雑木林のある風景がしきりに脳裏に浮かび、澄んだ東北の空の色がまぶたの裏に滲み出すように現れる。仲間の工事屋たちは相変わらず忙しく動き回っているのだろう。

そんな圭介を陽子は不思議そうに眺めていた。その眼差しには不満の色があったようにも思える。一体何が圭介を現場に引きつけていたのだろうか。

圭介が一時帰社する直前の数日間、工事屋たちが宿に戻るのは十二時近かった。東北の秋は短く夜はかなり冷える。仕事で遅くなると、こんな田舎町では遅くまで開いている店がないため、彼らは冷気に震えながら駅前の自動販売機のうどんを食べるのだった。

箸を動かしながら、こんな辛い工事は早く終えて帰りたいと誰もが思った。それでも彼らの心を捉えるものが、ここにも有ることは有った。その一つは空の色だった。

工場のトイレは現場からかなり離れているため、工事屋たちは仮設ハウスの裏に続く雑木林の中へ分け入って小用を足してしまうことが多かった。その間、彼らは仕事から解放されてじっとたたずみ、木々の梢を見上げる。黄色くなった葉の一枚一枚が小さく震え、その間から覗く空の色が瞳に映る時、彼らは充足感に浸ることができた。

しかし、充足感が持続するのはほんの短い間にすぎない。ざわざわと湧いてくるような工場の操業の音は、解放されて充たされた感覚に、再び厳しい労働の予感を注入していく。今夜もまた遅くまでハンマーを振るわねばならないのか。逃げ出したいような、何もかもを捨て去ってしまいたいような気持ちが、つい先ほどの充足感と入れ替わってしまう。

そういう現場へ戻って行きたいと、圭介はあの時真剣に望んだのだ。何が違っているというのだ。今、自分が見上げている空と、あの工場の空と。再び楠の梢を見上げた時、圭介は心の中で呟いてみた。そう、確かに違っている。

あの雑木林で見上げた空は心に深く差し込んでくるようだった。あの一瞬には、生きる歓びとでも言ったらよいだろうか、そんなものが激しく心を揺さぶっている、といった感動があった。

しかし今、心を揺さぶるようなものはひとかけらも感じられないのは何故なのか。つい先ほど、今のこの瞬間が自分にとっては主人たる日々だと思い込み、心が充たされていたのが嘘のようだ。

陽子の声が圭介の思考を中断させた。
「あなたが仕事の話をするのは久しぶりのことね」
「・・・・・・・・そうだな」
「あの東北の工場以来ではないかしら」
「そんなに以前のことではないだろう」
「私の記憶ではあれ以来だわ。あの頃からあなたは少し人が変わったみたいで、前にも増して会社の話をしてくれなくなったもの・・・・・・・・」

その通りかもしれない、と圭介は思った。黙って首を上下に揺らす彼に、彼女は言葉を継いだ。

「でも今日の話はあの頃とは反対ね。あの頃のあなたの話は私の想像力を動かしたわ。私はあなたの働く現場やその周囲の情景を頭に浮かべることができたわ。あなたの話の中で、空は空の色をしていたし、雑木林は雑木林の色をしていたからなのよね、きっと」

圭介は、はっとした。自分の内部で、閉じられていた蓋が音が立てて開くような気がした。蓋の開いたところに、何かがぼんやりと見えている。そうだ、確かにあの東北の工場の記憶には、色も着いているし、音も聞こえる。あそこで何かが変わったに違いない。あの空の下で何かが変わり、雑木林の色が変わる間に、人々の間に何かが起こったのだ。

三年前の記憶の断片が圭介の頭の中で浮き沈みし始めると、その一つ一つを環でつなぎ合わせようと気持ちを集中させる圭介を、重く沈んだ空気を取り巻いていった。額にしわを寄せたり、目を宙に泳がせたりしながら、彼は立ち上がり楠のまわりを歩き始めた。

陽子が子供たちを連れ戻しに行った。子供たちは下着を替えて服を着ると、シートに上がって缶ジュースを一本ずつもらって嬉しそうだった。服が濡れて気持ちが悪いと文句を言う夏子に、「言われた通りにしなかったあなたが悪いのよ」と言って陽子は取り合わなかった。

さっぱりした気性の夏子は、あっさり諦めてすぐに機嫌を直したようだった。ジュースを配る時、陽子は圭介にも「いかが？」と声をかけたのだが、彼は沈んだ声で「いらぬ」と答えたのだった。

一休みした後、陽子は子供たちの蝉取りについて行ったため、圭介は一人取り残された。四人は池の端を通過して向こう側の林の中へ入って行った。丈の伸びた芝がびっしりと生えている池の端の広場には人影がなかった。先ほどよりいくらか日差しが弱まったようだが、人々は未だ木陰で休むか、水と戯れるほうを選んでいた。

五. 変わりゆく人たち

東北の工場は業界では老舗だった。他の後発メーカーが追いつこうとして、積極的に設備投資をするのを横目で見ながら、古い機械を動かして操業していた。しかし、新鋭設備を駆使した他社の追い上げは激しく、市場のシェアはじりじりと下がっていった。

昔ながらの経営では高度成長時代を乗り切ることができないのは歴然としていた。結局はこの工場も新鋭設備を導入することになり、圭介の勤務する会社に設備一式を発注したのだった。

この工場と接触し始めた時、圭介が先ず感じたのは、従業員の間につながりが家族的で暖かいことだった。高度成長時代に入ってから、組織や人事の管理を近代化していく企業が圧倒的に多い中で、この工場の空気は、忘れられようとしている人情を感じさせるものが有った。圭介たちはこの空気を、初めのうちは快いもの感じていた。

設計担当者の小島の話によると、制作にかかる前の打ち合わせも和気あいあいの雰囲気うちに回数を重ねていたようだ。しかも、打ち合わせが終わった帰りがけには、必ず駅前の寿司屋で盃を傾け合っていたらしい。

工場側の建設スタッフは、竹田というゴルフ好きの課長が責任者となり、その下の島川という主任技師が実務を担当していた。竹田は小柄で顔色は青白く、目に落ち着きのない男だった。目尻にしわを寄せて皮肉を言うことが多かった。

島川は背が高くやや赤ら顔で、言葉に若干の関西なまりが有った。当時、竹田は四十歳代前半、島川が三十五歳くらいだったろう。実務処理の上で島川が優っているのは誰の目にも明らかだったが、島川は竹田によく仕え、二人のコンビは上々のようだった。実際、二人は仲が良かったのだと、後日小島が工場の若い工員から聞かされている。

工事の初期段階は、そういった雰囲気の中で無事に過ぎていった。しかし、こういう規模の工事では、両社間で範囲の区分を決めていても、細かい点で抜け落ちた項目があったり、施工方法の解釈に誤解があったりするものだ。抜け落ち事項の穴埋めや施工方法の変更の要求が、竹田や島川の口から出始めると、先ず工事監督の林の機嫌が悪くなっていった。

竹田たちは、昔ながらの請負の職人たちにものを頼む感覚で言うのだが、受注者側に見れば、きちんと範囲と条件を決めて見積もりを提出して注文を受けたので、予算外のものを受けられぬという理屈になる。ここに、昔ながらの馴れ合い的管理と近代的管理の衝突が起こったのだ。

初めの数件の要求については、林は自分の手持ちの工事予算のやりくりをして受け入れたのだが、それには限界があった。林が工場側の要求を拒否し始めると、圭介たちに対する島川の態度が厳しいものになり始めた。

常識的には許容しても良いものまで細かくほじくり出して、島川は圭介たちを非難した。小島や林や圭介たちの釈明は、工場の人々には理解されないようだった。こうして、圭介たちは工場側と完全に対立する状態になってしまったのである。

工場の人々は、圭介たちをも自分たちの家族的なつながりの中に組み入れようとして失敗したのだった。はたで見ていると快く感じられる暖かいつながりも、近代化された管理の下でのドライな人間関係に慣らされている者にとっては、いざ自分が入っていくとなるとうっとおしいものを感じられたのだ。

小島や圭介にしても林にしても、予算内に仕事を管理することが最大の目標だったのである。竹田も島川もそのことを理解できなかったのだ。

圭介たちも必死の思いに駆られていた。とにかく工事を完遂しなければならないのだ。納期の遅れは一日たりとも許されない。島川のいやがらせ的あら探しがますます激しくなるのを何とか克服しなければならない。

「とにかくこの機械を日本一の機械にしようじゃないか。結果がそう出れば、途中での色々なトラブルは忘れ去られるものさ」

小島のこの一言に他の二人も同感であった。

「この機械を日本一にしよう」という目標に向かって三人は燃えたのだった。この種の機械のトップメーカーの技術者として、その目標については三人とも自信を持っていた。

小島がよく口にする言葉があった。以前から圭介はそれを知っていたし、その通りだとも思っていた。

「我々の使命は良い機械を作ることさ。我々の作った高性能な機械を使えば、労働者

たちは楽になり、製品は品質と生産量の両面で向上するわけだ。結局、我々は、良い機械を生み出すことによって、社会の発展に貢献することになるんだ」

この言葉に裏打ちされた心情が、圭介たちに希望を与えていたのだった。

しばらくして、島川が現場に姿を見せることが少なくなった。しかし、代わりに竹田が現場を見回り、島川と同じような注文を付けるので、圭介たちの苦労は相変わらずであった。昼食時に島川が社宅の方へ去って行くのを見かけることがあった。何気なく竹田に尋ねてみて判ったのは、島川が胃を悪くしているらしいということだった。

「細かいことを気にし過ぎるんですよ。もっとおおらかにやればいいのに」
そう言った竹田の言葉が冷たく響いていた。

工事の後半に入ると休日返上になった。休日に工事を行うためには、工場側のスタッフの一人に休日出勤をしてもらわねばならない。工場は労働組合との間で、有給休暇の年内消化の契約を取り交わしているため、秋も深まる頃には組合員を休日出勤させる余裕がなくなる。休日出勤の当番は自ずから管理職に回り、竹田と製造課長と製造部の次長の三人の交代制となっていた。

前夜来の雨が上がった日曜日の午後のことだった。当番日だったらしく、事務所には竹田一人の姿が見えていた。予定の仕事を終えた新田と圭介は地下室で配管工事の作業を眺めていた。雨が上がって風が吹き始め、外の空気は急に冷え込んできていた。寒さを避けるつもりで二人は地下室へ来たのだった。

林が配管工たちを指揮して、太径の鋼管を接続する作業をしていた。背後のスチール階段の足音に振り向くと、竹田が背を丸め、両手をズボンのポケットに突っ込んだ、いかにもみすぼらしい姿勢で下りてくる場所だった。「冷えてきましたなあ」と言いながら、竹田は新田の横に並んで配管工たちの作業に目をやった。

新田が話しかけた。

「竹田さんもたいへんですね。一週か二週おきに休日当番が回ってくるんでしょう」

「私らでも休めるような工程を立ててくれるとありがたいんですがねえ」

竹田は目尻にしわを寄せて皮肉っぽい笑いを浮かべた。新田はむっとしたようだった。

「我々工事の者は一生懸命やってるんですよ。工場の細かい要求も一つ一つ受け止めて、なおかつ、工期を守ろうととして……」

「いやいや、それはよく承知してますよ。しかし、私らもやっぱり、休日には休んで息を抜きませんか」

「それが自由にならないのが管理職のつらいところじゃないんですか。ぼくら課長と飲む時なんか、半分冗談で言うんですよ。課長が高い給料をもらうのは二十四時間勤務だからってね」

形成が逆転していた。新田の表情には余裕の笑いが戻り、竹田は真顔になっている。竹田の視線が落ち着きなく宙に泳いだ。

「私らが課長になった頃は、そんな厳しいものではなかったですねえ。自分の仕事ができるようになって、ある年数が経てばみんな昇進しました。仕事の中身だって、それまでとさほど変わるものではなかったですよ。私らのところは、お宅の会社みたいに成長期の波に乗って伸びていくようなことがなかったせいもあるんでしょうがね。私なんかはもう、この会社の空気が骨まで染み込んでしまってますんでね、お宅のように合理的でドライ、時にはモーレツなやり方には心情的になかなかついていけません。私らのやり方やものの考え方が、だんだん通用しなくなっていくというのは寂しいものですよ……」

話の意外な展開に圭介は驚いた。いつもの竹田らしくない。無理難題を押し付けてくる、あの憎い竹田課長は何処へ行ってしまったのだろうか。圭介たちがモルタルの汚れと汗にまみれて動き回っているのを、冷ややかに見下ろしていた竹田は何処へ消えてしまったのだろうか。

新田は対応に困っているようだった。気まずい空気が三人の周りに充満し始めるのをよそに、配管工たちは太径パイプのフランジ合わせの作業に集中していた。

再び口を切ったのは新田だった。

「竹田さんは毎週ゴルフに行かれるんですか」

「コースに出るのは月に一度か二度ですよ。打ちっ放しは毎週やってますがね」

「社内一、二の腕前になるには、そのくらいの練習が要るんでしょうね、やはり……」

「私は上手になろうとは思いません。楽しみなんですな、ゴルフをすることが。ゴルフをしている間は何もかも忘れられるんですよ。人間誰でも、こういう楽しみが有るから生きて行けるんじゃないでしょうかね。……そう、確かにそうですよ」

相変わらず両手をズボンのポケットに突っ込み肩をすぼめたまま、竹田は遠くを眺めるような目をして話し続けた。

「新田さんも私くらいの年齢になったら、きっとそう思いますよ」

十月初めの工場の運動会のことを、圭介はふと思い出していた。竹田は実に楽しそうにしていた。若い女子社員と二人三脚を組んで走ったり、大声を上げて応援したりして、柔らかな日差しの下での半日を十分に満喫しているようだった。

これに反して、島川はあまり乗っていなかった。人々が動き回るのに冷たい眼差しを送り、周りで騒ぎまわる者たちにしかめっ面を向けていた。昼食時に配られた缶ビールを飲まず、缶ジュースを求めていた島川は、その時すでに胃を悪くしていたのかもしれない。

ゴルフをしている時の竹田は、あの運動会の時と同じ表情をしているのだろうと圭介は思った。

「私は無趣味な者だから……」

新田が苦笑しながら応じた。

「それはいけないなあ。新田さんもゴルフを始めたらいかがですか」

「いやあ、私はどうもゴルフは好きになれそうもありません。それに、今は仕事を充実させたい気持ちのほうが強くて……」

「仕事が趣味っていうのは嘘ですよ。あれは趣味にはならない。仕事が百パーセントじゃ人間は長くは生きられないでしょう。そう思いませんか」

「……」

やや元気づいてきた竹田の問いかけに、新田は答えなかった。高度成長期に入社し、その時代を通じて仕事を覚えてきた、三十歳を過ぎたばかりの新田には、その答を未だ見つけることができなかったのだろう。

竹田が更に言葉を継いだ

「私なんか昔は良かったなんて言うと、愚痴にしか聞こえないでしょうけどね。みんなもっと落ち着いて仕事をしていましたよ。息抜きとか気晴らしをしなければやっていけないほど、追い詰められた気持ちにはなっていませんでしたよ……」

地下室の壁の向こうに、何かが見えるような眼差しを向けながら、竹田はよく喋った。隣に立つ新田の顔には、もう相槌を打つのも面倒だという気配が見えていた。間に新田をはさんで立ち、圭介は竹田の話に耳を傾けていた。

周りに工場の人間が誰も居ないという気安さが、竹田の心をここまで開くことになったのだろう。話を聞いているうちに、今日の竹田が本当の竹田の姿ではないかと圭介は思い始めた。

思い出してみると頷けることもある。圭介たちに無理な要求を突き付けてくる時、竹田の視線はいつも不安げに宙に舞う。それを圭介は竹田の癖だとばかり思っていたが、どうやら見間違いだったらしい。竹田の精神の動揺や不安、あるいは過度の緊張が目に現れていたのだ。竹田がこの工事の責任者の立場を重荷に感じているらしいのを、圭介はこの時初めて気付いたのだった。

配管工たちが最後の配管に手を着けた時、林が立ち話をしている三人に「これ一本で終わりますから」と声を掛けると、竹田は話を止め、「そろそろ私も事務所の戸締りをしてきます」と言って階段を上って行った。肩をすぼめ、両手をポケットに突っ込んで歩く竹田の後ろ姿が、ますます貧相で寂しげに圭介の目に焼き付いた。

試運転が始まると、本格運転までに機械の運転を覚えるために、工場の運転員たちが圭介たちと行動を共にするようになった。運転員たちが圭介たちと直接接触するのは、この期間だけだ。設計に携わっている小島はこの機会を大事にし、一服点ける時などに積極的に運転員たちに話し掛けた。直接機械に手を触れ、機械の機嫌に一喜一憂する運転員たちの話や意見が機械の設計や改善に役立つ、というのがその第一の理由だった。

運転員たちは公式の席では決して“ほんね”を言わない。機械メーカーの設計者たちが聞かされるのは殆どが“たてまえ”なのだ。運転員たちは、経営者や管理者たちから怠け者と思われたり、向上意欲が欠けていると思われたりするのを嫌うため、公式の席では幾分無理をして気張った発言をするのだ。そんな運転員たちが“ほんね”を語る殆ど唯一の機会が現場での一服なのだ。共に汗をかいた後の一服が、暗黙のうちに相手に対する信頼感を育てるのだろう。

運転員たちと小島とのやりとりを、圭介は黙って聞いていた。
「あんたたちが良い機械を作ろうとしているのはよく解るんだけどね……、あまりやり過ぎになると、俺たちが困ることもあるんだよなあ……」
「ほお……何がですか、一体」
「……」

運転員たちは顔を見合わせて押し黙る。小島が気配を察して、控え目にもう一度催促する。

「差し支えなかったら教えてもらえませんか。僕ら勉強にもなるし……」
三人の運転員たちは互いに牽制するような視線を交わしていたが、リーダー格の男が意を決したらしく口を開いた。
「この機械が動き出したら、要員を一人減らすように言われているんだよ。二台を三人で運転できる機械にするとしたのはあんたたちだろう」
「む……、そうですけど。でもこの機械ならやれるはずですよ」
「確かに、できないことはねえや。だけど苦しいよな。三人じゃあ……」

他の二人の運転員が首を動かして同意を示すのを見ながら、小島が自信ありげな言葉を発した。

「よその工場では、もうかなり前からそれをやっているんですよ。その程度の努力はしてもらわないと、技術の向上が止まってしまうよ」

圭介にとっては決定的と思えるこの一言に対して、意外にも運転員たちはひるまなかった。

「よそさんだって無理してるんだよ」
他の二人の方から自分の足下へ視線を移してリーダー格の男は喋った。
「会議に引っ張り出されたら、誰だって消極的なことは言えねえんだよ。よそではもうやってるよ、なんて言われると、まあ何とかやれるでしょうとしか答えようがねえや」
「……」

小島は返事をしなかった。不服に満ちた顔がしばらくリーダー格の男の方へ向けられていた。

圭介には小島の気持ちがよく理解できるのだった。今度の機械は以前のものに比べて格段に良い機械だ。小島たちの設計チームが使用者の要求を具体化するために苦しんできたのを、圭介は知っている。設計者たちの苦しみが一度溶解し再結晶したものがこの機械だと言ってもよかった。

その日の運転員たちとの何気ない一服話は、圭介の中に波紋を起こしていた。自分たちが苦しみ抜いて作った良い機械が、運転員たちの苦しみの源となってしまう。これは一体どういうことなのだ。

機械を作る技術者たちの苦しみが、機械を使う技術者たちの苦しみを和らげるのに役立たない、ということなのか。自分たちの苦労は報われることがないのではないかと思った時、今まで自分を支えてきた希望に影が差してくるのを圭介は感じたのだった。

その夜の帰り道で小島は吐き捨てるように言った。
「怠け者ばかりだな、この工場のやつらは……」

12月初めのある夜、圭介は島川と並んで、駅前の寿司屋のカウンターに両ひじを突いていた。気分が引き立たず、うつむき加減にして杯を唇に運ぶ圭介に向かって、島川は機嫌よく顔を紅潮させて語りかけていた。堰を切ったように流れ出る島川のお喋りに圭介は辟易とし、こんなことなら小島に居残ってもらうんだと後悔した。

その日の午後、新しい機械の運転が開始され、無事に稼働することを確かめてから、「あとはよろしく」と言い残して小島は帰っていった。有能かつ多忙な設計者には、もう次の仕事が待ち構えているのだった。

店内に他の客は無く、目には閑散としていたが、島川の怪気炎を伴うお喋りが時間と空間を埋め尽くすように響いていた。島川の声が止んだ時に、冷え切った外気の中を渡ってくる踏切の音が周囲の静寂を気付かせてくれるのだった。

島川の話の多くを占めていたのは竹田のこき下ろしだった。あんな無能な男は会社にとって害になる。あんな男を課長にする会社はどうかしている。その点、圭介たちの会社はさすがだ。適材適所に然るべき人を配置している。

そういう話を島川は何回も繰り返した。そして、自分が胃を悪くしたのは竹田のためだとも言った。

「……私はね、お宅らに対して随分無理なことを言いましたよ。でもね、あれは私の本心じゃない。私は少なくとも竹田さんよりはお宅らの仕事が分かっていたつもり

ですよ。竹田さんは何も分からないから平気で無理を言う。またそれを私に言わせるんだな。知らないものだから、自分が責任を持って遂行する自信が無いんだ」

少々の間を置いて島川は再び喋り出した。

「私は心の内にあることと反対のことを、口に出して言わなければならなくなって悩みましたよ。そしてとうとうこのざまですよ……」

島川は胃の辺りを右手で撫でて白い歯を見せて笑った。

「手を引いてからも私はずっと傍で見てましたがね、頼りないったらありゃしない。今日の運転だってね、私が工場長に直訴しなかったら未だ何時になるか分からなかったようなものですよ……」

「へえー、島川さんが直訴なんかされたんですか」

「実はそうなんです」

島川は得意げに笑って喋り続けた。

「一週間前になっても未だに材料の段取りが出来てないんですよ。そのくせ、お宅らに対しては、工事を遅らすような難癖をつける。傍で見ていて不安になりましたね。これではいつになったら新しい機械が動かせるのかと。そんなわけで、とうとうケツをまくってしまいました」

そこで島川はふうーっと一息ついた。

「しかし、工場長も見るところは見てましたねえ。『工事が終わるまでは竹田君に任せたい形にしておこうじゃないか。一応彼の功績ということにしてやった方が良いよ。材料の段取りについてはぼくが会議を招集して提案しよう。試運転段階が終わったら君に任すからしっかりやってくれよ。竹田君の行先はもう決めてあるから』と言うんですよ。」

私の方がびっくりしてしましましてねえ。まさか竹田さんが下請け会社へ出向させられるなんて、思いもよらなかったですから……」

島川の口ぶりは工場を去る竹田を残念がるようだったが、彼の表情や所作から浮き上がってしまっているのを圭介は感じ取った。

「さあ、来年からはお宅らの仕事ぶりを見習ってバリバリやるぞ」

島川がカウンターを右の拳で叩いて大声を上げた。島川が昂揚するにつれて沈んでいく自分を感じながら圭介は、今まで自分が信じてきたことも、島川がたった今語ったことも、どこかにポツカリと穴があいているようだと感じていた。

頭の中には、肩をすぼめて背を見せている竹田と、うつむいて話す運転員たちの影が、霧の中から現れるように浮かび上がっていた。

六. 生きている者たち

陽射しがいくらか和らいだと感じられるようになると、人々が池の端の広場に姿を見せ、ボールやフリスビーが飛び交い始めた。子供たちは蝉捕りから戻り、あぶら蝉を何匹か入れた虫籠をシートの上に放り出したまま、補虫網だけを持って広場を走り回っていた。どうやら、広場の草むらの中にトノサマバッタがいるらしかった。

しばらく子供たちと一緒に広場に立っていた陽子が戻ってきて言った。
「どうお、あなたも少し子供たちと一緒に虫捕りでもしたら・・・・・・・・」
「うむ・・・・・・・・」

圭介は空返事をした。またいつもの“うわのそら”が始まった、という表情を見せて陽子はシートに腰を下ろし、「あなたも座らない」と促した。

二人並んで座り、子供たちを眺めながらの沈黙がしばらく続いた。そうしているうちに、子供たちの動きを追う圭介の目に光が戻っているのを陽子は感じ取った。

「元気が出てきたようね」
「ああ・・・・・・・・」
「子供たちと遊んできなさいよ・・・・・・・・」
「うむ、もう少ししたらな」
「・・・・・・・・」

再び短い沈黙があった。蝉の声と風の音、そして夏空の輝きが時空間を満たしていた。
「子供というものは、いつでも生きているんだなあ・・・・・・・・」

圭介の呟きに驚いて、陽子は首を回した。彼の横顔を見つめる彼女の顔には、どうかしたの？、というような表情が浮かんでいた。

圭介は思う。子供のすることは全て希望に裏打ちされている。どうしようもないから仕方なしにするというのは大人だけのことだ。だから、子供には、主人たる日々だけしか存在しない。希望を持っているということは、生きているということだ。生きていれば五感は正常に働き、全てを感じ取ることができるのだ。

東北の工場で一生懸命働いていた頃の自分は生きていた。それが・・・・・・・・。こんなことは、いつも子供の生活に触れている陽子にとっては、分かり切ったことなのかもしれない。

そう言えば、夏休み前の夏子の誕生会に集まった子供たちのことを、陽子が話してくれたことがあった。遊び、お喋り、喧嘩、衝突、笑い。あらゆるものの中に男の子も女の子も、希望と共に動いている様が彷彿としていた。

誕生会の話をするとう陽子は大きく頷いた。
「みんな良い子だわ。可愛い子供たちだわ」
「ふーむ、そうかい」
「そうよ。私なんか、みんな可愛がってあげちゃうんだけどなあ……」
「そんな良い子たちがさ、だんだん大人になるにつれて変わってしまうんだから、寂しいよなあ」
「それは仕方がないわよ」
「そうかなあ」
「そうよ。教育のせいもあるけど……」
「教育かあ……。うちの三人はどうなるんだろうなあ」
「さあ……。どうかしらねえ」
「よその人たちから、良い子たちだなんて言われてるのかな」
「わからないわ」

そこで二人とも黙った。自分の内部で何かが大きく膨らんでくるのを感じて、圭介は陽子の方へ顔を向けた。広場の方へ目をやっている陽子の横顔に木洩れ日がさしていた。その横顔が美しいと思うと同時に、この女は生きているという実感が胸に迫った。

「おれたちの子供は、あの三人だけではないということなのかな……」
「そうかしら……」
「同じようにさ、あの子たち三人もおれたちだけの子ではない、ということにもなるけど……」
「よくわからないわ、私」
「うむ、おれもわかってはいない。だけど何かを感じるよ、今は」

幼い声が「おかあさーん」と呼ぶのが聞こえた。光子がこちらに向かって走ってくる。彼女の背後には、補虫網を地面に押し付けた二郎と、網の中を覗き込んでいる夏子の姿があった。光子は獲物を知らせに走ってくるらしかった。白い帽子が彼女の背後に飛んで落ちた。陽が傾きかけていた。夏を惜しむような光が彼女の髪に跳ねて踊った。
「よおし、ちょっと見てくるか」
圭介はゆっくりと腰を上げた。

(完)